

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00976

研究課題名(和文) 日本古代における地域開発の総合的・通時代的研究—山城北部地域を中心に—

研究課題名(英文) Comprehensive and chronological research on regional development in ancient Japan-Focusing on the northern part of Yamashiro-

研究代表者

吉野 秋二 (YOSHINO, SHUJI)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：50403324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、古墳時代～平安時代、山城北部地域を主たる対象として、氏族を主体とする地域開発の史的展開を考察し、評価したものである。

本研究の対象地域には、秦氏などの古代氏族が居住し、公権力と関わりながら、開発主体として通時代的に活動する。本研究は、寺社史料などを活用し、長岡京・平安京遷都の前後を通じて、山城北部の地域開発を考察する。対象地域に関しては、考古学・歴史地理学など隣接諸科学においても、重厚な調査・研究の蓄積がある。本研究では、都城制・寺院史・庭園史分野における学際的研究の経験を踏まえ、古代地域史研究の範となる水準を目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本古代の地域開発史に関しては、都城制研究と村落史研究において研究の蓄積がある。しかし、両者を総合する試みは、西大寺所蔵絵図を活用した研究など、平城京・周辺域で部分的に実施されているに過ぎない。長岡京・平安京周辺地域に関していえば、良質な自治体史は存在するものの総じて研究が遅れている。本研究の研究成果の意義は大きい。

研究代表者は、出土文字史料の解読調査等を通じて、京都市・近郊地域の調査・研究機関の構成員と日常的に交流し、地域に即した研究・教育を実践している。本研究は、長期的視座に立ち、そうした活動の基盤形成を図ったものでもある。

研究成果の概要(英文)：This study considers and evaluates the historical development of regional development centered on the clan, mainly targeting the northern part of Yamashiro from the Kofun period to the Heian period.

Ancient clans such as Mr. Hata live in the target area of this research, and while being involved with public authority, they are active throughout the ages as a development entity. This study considers the regional development of the northern part of Yamashiro before and after the relocation of Nagaokakyo and Heiankyo, utilizing historical materials of temples and shrines. Regarding the target area, there is a heavy accumulation of research and research in adjacent sciences such as archeology and historical geography. In this study, we aimed at a level that would serve as a model for ancient regional history research, based on our experience in interdisciplinary research in the fields of metropolitan castle system, temple history, and garden history.

研究分野：日本古代史

キーワード：山背 氏族 地域社会 地域開発 古代寺院 寺社史料 地域史 学際的研究

1. 研究開始当初の背景

研究開始時の研究状況について、学界の研究動向、研究代表者自身の研究の推移をあわせて説明する。

日本古代の地域開発史は、都市を対象とする都城制研究、農村を対象とする村落史研究を中心に研究が蓄積されてきた。しかし、両者を総合する実証研究は少なく、西大寺所蔵絵図を活用して平城京・周辺域の地域開発を追究した佐藤信編『西大寺古絵図の世界』(東京大学出版会、2005年)などが挙げられるに過ぎない。

本研究が対象とする山城北部地域(現京都市域)に関していえば、『宇治市史』『長岡京市史』のような良質の自治体史は少ない。また、古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』(角川書店、1994年)のような調査・研究成果を概観する事典的な出版物は存在する。しかし、前述の『西大寺古絵図の世界』にあたる実証研究は存在しない。古代氏族に関する研究も、賀茂氏や秦氏など個別の氏族をとりあげた優れた実証研究はあるが、総合的・通時代的把握には至っていない。

権門寺社が多く存在する山城北部地域は、世界有数の文献史料の宝庫である。権門寺社関係史料には、膝下所領の経営に関する情報を含むものが多く、古代地域史にとっても有益である。考古学・歴史地理学分野でも重厚な調査・研究の蓄積がある。しかしながら、それらを総体として活用する作業は十分に行われていない。

研究代表者は、日本古代社会経済史分野、特に、身分制論、社会集団論、労働力編成論などを中心に研究を進め、2010年、その成果を、吉野秋二『日本古代社会編成の研究』(2010年)にまとめた。2010年以後は、村落を含む地域社会の実態分析が課題として残された。そこで科研費研究として、平成23年～25年度に、基盤研究(C)「寺院史史料による古代地域社会の復原研究」、平成26年～29年度に、基盤研究(C)「長岡京・平安京近郊地域の研究 - 寺社史料を中心として - 」を企画し、寺社史料を主要な分析素材として、古代の地域社会を復原する研究を続けている。

古代の地域開発は、中央官司・国郡司など公権力を主体とするもの、それ以外を主体とするものに二分される。村落史研究に関しては、後者への目配りが重要で、大化前代の部民制の時代から、中世荘園制の成立までを見通せる視座を追究する必要がある。研究代表者は、かつて『広隆寺資財交替実録帳』を素材に、平安時代前期を中心に広隆寺の膝下所領経営を通時代的に分析した学術論文吉野秋二「平安前期の広隆寺と周辺所領」(2012年)を発表したことがある。長岡京・平安京遷都の前後を跨がる形で、古代氏族による地域開発の実態を具体的かつ全体的に解明したもので、本研究の直接の前提となっている。

2. 研究の目的

日本史学、特に古代史では、政治制度史などと対照的に、社会経済史分野は長く沈滞している。前述したように、研究代表者は、このような状況を打破するため、2010年までは、身分制・労働力編成論など「人間の編成」に関する研究に取り組んできた。2010年以後は、古文書など一次史料(古文書・木簡など)を活用し、「地域の編成」に関わる問題群に挑んでいる。最終目標は、日本古代社会の実態的・総体的把握である。

日本古代史研究、特に奈良・平安時代史研究は、国制を全体的に把握し得る法制史料、社会の実態を多角的に追究し得る一次史料、双方に恵まれている。特に都城と周辺地域には、寺社を中心に膨大な史料が残されている。世界的に見ても、文献史学研究者にとって、地域社会の形成を具体的かつ全体的に検討し得る希少なフィールドといつてよい。

京都産業大学に所属する応募者にとって、本研究の対象地域は「ホームグラウンド」である。研究代表者は、(公財)京都市埋蔵文化財研究所など諸機関の調査に参加する機会も多く、社会的責任も大きい。本研究は、考古学など隣接科学はもちろん、広く地域社会を対象とする他分野の研究者に文献古代史の特性を発信し、学際的な調査・研究の礎を築くことを目標として企画したものである。

3. 研究の方法

本研究は、山城北部地域(現京都市域)に焦点をあてた古代地域社会の復原研究である。まず、主要分析素材である寺社史料に関して、基礎的検討を行った。古代の主要史料は、『長岡京市史』、『史料 京都の歴史』などに掲載されているが、主要寺社に関しては、中近世史料も含めて検討対象とした。

また、考古学、歴史地理学的追究、具体的には、地名調査、発掘調査報告書の通覧・検討などを行った。特に、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、(財)向日市埋蔵文化財センターなどが発刊した発掘調査報告書に関しては、条坊関係、寺社関係の遺跡を中心に内容を精査した。また、京都在住の利点を生かし、頻繁に現地踏査を実施し、調査・研究成果の検証を行った。

古代地域史研究は、分析材料となる史資料、特に文献史料が特定地域に遍在している。したがって、各地域の資料の全体的状況を意識して、ケーススタディーを蓄積することが必要である。

本研究では、出雲地域(現島根県域)、吉備地域(現岡山県域)など古代地域史研究の先進地域に赴き、フィールドワークや文物の検討、研究報告を行った。また、口頭報告吉野秋二「平安京跡出土木簡の現況」(2021年)を行い、準備の過程で、平安京跡・周辺地域出土の木簡・出土文字資料を網羅的に分析した。

研究代表者は、勤務先の京都産業大学において、日本文化研究所兼務所員として共同研究「京都の風土と文化が日本人の美意識の形成に及ぼした影響に関する研究」(2019年度～2021年度)、「京都文化の自然観と産業(むすびわざ)都市の形成に関する研究」などに参加している。また、学外では、科研基盤研究(A)「古代「仏都圏」の社会と文化に関する地域史的・比較史的研究」(研究代表者：京都大学吉川真司教授、2016年度～2019年度、吉野は分担研究者)の一環として実施されている古代寺院史研究会に継続して参加した。これらは、近隣の寺社関係者、京都市・近郊の学芸員・埋蔵文化財発掘調査担当者などとの学際的研究の場でもある。本研究の発表や、上記諸機関の担当者との意見交換の場として活用した。

なお研究代表者は、(公財)京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査で文字資料が出土した際、解説作業など調査の一部に参画している、2020年度以後は、正式に「平安京・中世京都における出土文字資料の研究」に従事する客員研究員の任についている。本研究の間中も、発掘調査報告書の分担執筆など研究所の活動に協力している。また、研究所職員と山城北部地域の考古学調査の成果について、意見交換を続けている。

4. 研究成果

本研究の研究成果について、執筆業績、口頭報告に分けて説明する。

(1) 執筆業績

まず、諸氏族の地域開発に関する成果として、菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』(思文閣出版、2019年)に、吉野秋二「山背の行基寺院 - 紀伊郡域を中心に -」を執筆した。山背国内において紀伊郡は行基が創建した四十九院が最も濃密に分布する地域である。また紀伊郡深草地域は、葛野郡太秦地域と共に秦氏が広く居住した地域でもある。本稿では、特に、法禅院など紀伊郡深草地域の行基寺院に焦点をあて、考古学・歴史地理学の成果もまじえながら、行基の活動と秦氏の地域開発との関係を考察した。

次に都城制に関する研究成果として、吉野秋二「平城京における災異と救済」(『都城制研究』13、2019年)を執筆した。また、川尻秋生編『古代文学と隣接諸学 8 古代の都城と交通』(竹林舎、2019年)に吉野秋二「平安京を探る」を執筆した。前者は、宝亀年間に平城京左右京で実施された賑給に関する史料を足がかりに、災害時における救済活動の実態、京の住民構成などを考察したものである。主眼は奈良時代だが、薬師悔過・御霊会などの宗教的事象も含め、平安時代の都市社会の変容について理解を深めた。一方、「平安京を探る」は、平安京研究における学際的研究の研究史・方法論を概観した上で、近年の発掘調査の成果、特に平安京右京四条一坊二町跡、左京三条一坊六町跡の調査成果の意義について、仮名墨書土器などを取りあげて解説した。また、平安時代前期の貴族邸宅の歴史的な性格について、邸宅と庭園との関係を中心に論じ、郊外の離宮・別業の性格についても言及した。

なお平安時代初期の邸宅跡が出土した平安京右京三条三坊五町跡の正報告書『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2017-15、2018年)に、吉野秋二「墨書土器と文献史料」を執筆した。右京三条三坊五町は、平安時代中期以後に榎霞寺領となることから、邸宅の所有主としては、嵯峨天皇と関わる皇族が想定され、「政所」と墨書された土器が出土している。したがって本稿は、皇族の家産経営を追究した成果でもある。

その他、研究史に関する成果として、吉野秋二「書評 榎本淳一著『日唐賤人制度の比較研究』、『唐代史研究』第23号、2020年」、吉野秋二「書評 宮川麻紀著『日本古代の交易と社会』、『ヒストリア』第283号、2020年」を執筆している。院宮王臣家、地方豪族の地域経営、奴婢制・交易制の実態分析など、本研究と連関する内容を含む。

なお一般読者向けの選書として、吉野秋二『古代の食生活 食べる・働く・暮らす』(吉川弘文館、2020年)を出版した。奈良・平安時代の食生活を、特に労働編成との関係に着目して描写したものである。地域開発と関わる労働現場における饗宴や食料給与の意義に関しても言及している。多様な史資料を有機的に活用し、古代の社会経済を具体的かつ全体的に論じたものである。

(2) 口頭報告

まず本研究が主たる対象とする山城北部地域について。

吉野秋二「「上京」と出雲寺・御霊神社 平安京近郊の地域形成」(2018年)は、賀茂川西岸を本拠地とした出雲氏・賀茂氏に焦点をあてたものである。出雲寺・御霊神社を中心に、古代出雲郷域の変容を、北方の賀茂六郷のそれとあわせて、江戸時代から奈良時代へ遡源して考察したものである。口頭報告の準備過程で、上賀茂神社・下鴨神社・御霊神社・出雲寺関係の寺社史料、対象地域の発掘調査報告書等について史資料の蒐集、分析作業を実施した。

吉野秋二「愛宕郡の氏族と古代寺院」(古代寺院史研究会第47回例会、2018年)は、賀茂川東域に分布する古代寺院跡の造営氏族、特に北白川廃寺跡の造営氏族について考察したものである。北白川廃寺=「粟田寺」説の根拠史料を、角田文衛など先行研究が捨象したものも含め詳細に検討した。北白川廃寺に関しては、さらに吉野秋二「北白川廃寺と粟田寺」(京都産業大学日本文化研究所9月例会、2021年)を行い、発掘調査報告書の批判的検討も含め理解を深めた。

次に地域史全般に関わるものとして、吉野秋二「古代・中世讃岐平野の寺院と開発」において讃岐国多度郡善通寺周辺地域をフィールドとして考察し、郡領氏族佐伯氏の転成の過程を解明することができた。香川県の埋蔵文化財関係者とも情報交換を行い、最新の発掘調査成果について理解を深めた。讃岐の地域史に関しては、吉野秋二「古代讃岐の地域史史料」(第5回古代地域社会史研究会、2021年)も行い、方法論的検討を行った。

最後に資料論に関する成果として、2021年、慶北大学校(韓国)人文学術院 HK+事業団第二回国際學術大會「木簡から見た古代東アジアの物資流通とアジア」(2021年2月25日~26日)の第一日に吉野秋二「平安京跡出土木簡の現況」(オンライン報告)を行った。報告は、平安京跡出土木簡の現況を今後の調査・研究の課題・方向性も含め考察したものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉野秋二	4. 巻 23
2. 論文標題 書評 榎本淳一著『日唐賤人制度の比較研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 140-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野秋二	4. 巻 283
2. 論文標題 書評 宮川麻紀著『日本古代の交易と社会』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 54-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野秋二	4. 巻 13
2. 論文標題 平城京における災異と救済	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都城制研究	6. 最初と最後の頁 13-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野秋二	4. 巻 2017 - 15
2. 論文標題 墨書土器と文献史料	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告	6. 最初と最後の頁 78-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 平安京跡出土木簡の現況
3. 学会等名 2021年慶北大學校人文学術院HK+事業團第二回国際學術大會「木簡から見た古代東アジアの物資流通とアジア（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 古代讃岐の地域史史料
3. 学会等名 第5回古代地域社会史研究会(岡山大学)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 北白川廃寺と栗田寺
3. 学会等名 京都産業大学日本文化研究所令和3年度9月例会(京都産業大学)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 古代の酒と労働
3. 学会等名 京都産業大学日本文化研究所例会令和元年度10月例会(京都産業大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 「上京」と出雲寺・御霊神社 平安京近郊の地域形成
3. 学会等名 日本史研究会2018年4月例会(機関紙会館5階大会議室)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 愛宕郡の氏族と古代寺院
3. 学会等名 古代寺院史研究会第47回例会(京都大学文学部陳列館会議室)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉野秋二
2. 発表標題 古代・中世讃岐平野の寺院と開発
3. 学会等名 古代寺院史研究会第48回例会(高松市埋蔵文化財センター会議室)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 吉野秋二	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 175
3. 書名 古代の食生活 食べる・働く・暮らす	

1. 著者名 大脇潔、高橋照彦、高正龍、吉川真司、堀裕、菱田哲郎、黒羽亮太、古閑正浩、根立研介、小澤毅、平松良順、藤岡穰、西田敏秀、上杉和央、網伸也、安村俊史、近藤康司、吉野秋二、西本昌弘、三舟隆之、三好清超、松葉竜司、向井佑介、清水昭博、田中俊明、井上直樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 512
3. 書名 古代寺院史の研究	

1. 著者名 上村和直、中大輔、中島正、中村太一、久米舞子、仁藤敦史、古市晃、吉野秋二、國下多美樹、大橋泰夫、小田裕樹、川尻秋生、市大樹、河内春人、海野聡、相原嘉之、荒井秀規、豊田裕章、近江俊秀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 532
3. 書名 古代の都城と交通 (古代文学と隣接諸学8)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------